

## ボランティア育成の動き

### NPO法人、初の講座を開講

東京パラリンピックに向けたボランティアへの関心が高まっていることを受け、障害者スポーツの普及を目指すNPO法人「STAND」が2月に初のボランティア育成講座(計5回)を開講した。障害者への接し方、スポーツ現場での障害者アスリートの支え方や英会話など、実際に大会を想定した「おもてなし」を学ぶ内容。定員50人の枠に約160人の応募があった。

2人1組で1人はアイマスクをつけて視覚障害者となり、もう1人は介助者の想定。椅子に座らせる時は視覚障害者に背もたれ、座面を必ず手で触れさせて高さなどを認識してもらう。

「実際にやってみると怖いし、難しい」というのが参加者の率直な感想だ。

実技講師の東京都視覚障害者生活支援センターの石川充英課長から「手を持つ時は上からだどつかまれたと感じてしまうので必ず下から。それも相手の気持ちを考えたおもてなしです」とアドバイスを受けると、参加者は一様にうなずいた。

STANDには、2013年9月に東京五輪・パラリンピック開催が決まった直後から「何か役に立ちたい」などの問い合わせが約100件寄せられた。「この意欲を失わせてはもったいない」と伊藤数子代表理事は講座開講をすぐに決めた。

意識したのはスポーツの国際大会で求められるボランティア。13年末から約1年間、スタッフが国内外の国際大会に足を運んだ。大会の受け付けや競技場での誘導など、現場のニーズ



アイマスクをつけてもらい、視覚障害者に椅子に座ってもらうための方法を学ぶ参加者―東京都内で

を学んで講座に生かすためだ。

英会話講座では「パンフレット」や「ゼッケン」「記入」などスポーツ大会の受け付けを想定した専門用語を学んだ。別の講座では12年ロンドン・パラリンピックの視覚障害者選手はどのようなサポートが良く、何に困ったのかなどの選手目線のアンケートも参考に勉強した。参加した会社員の男性(29)は「障害者アスリートへのサポートは通常の障害者とは違う部分もあるので、少しずつ専門知識を身につけたい」と意欲的だった。

本番まで5年。本大会のボランティアの募集はまだ始まっていないが、早い段階から準備をしたいと考える人も多い。大会組織委員会の顧問も務める伊藤代表理事は「組織委員会ではまだボランティア育成まで手をつけられていないので、その隙間をサポートしたい」と話している。 【浅妻博之、写真も】